

琳子ばあちゃん
と
マルラ



mikatuki98

琳子ばあちゃんは、今年で93歳になります。ずっと独身を貫いていましたが、63歳の時、ふと思い立って全財産を抱えヨーロッパ旅行へ出かけました。あわよくばヨーロッパの何処かの国で余生を送ろうと考えていたのです。

憧れの地はフィンランドでした。本当は寒いのが苦手でしたが、大好きなムーミントロールの故郷であること。オーロラが見えるかもしれないこと。そして若い頃から何故か白夜の雰囲気を経験してみたかったことが理由でした。

今、その夢が現実となり、琳子ばあちゃんはフィンランドの郊外にある、森のそばの小さな家に、独りでひっそりと暮らしています。家はこの国に来てから友人になった大工さんが建ててくれました。しかし友人は10年前に他界してしまい、それ以来、近くに住んでいる友人の子供たちの家族が、時々琳子ばあちゃんの様子を見に来てはお世話をしてくれるので安心です。それでも唯一の友人を喪い、淋しい思いをしていました。

そんな琳子ばあちゃんの心の慰めは、森に棲んでいるモモンガでした。ここフィンランドには、体調15～16cm・尻尾10～12cmのタイリクモモンガが、木の裂け目や洞、キツツキの空けた穴などに生息しています。

中でも琳子ばあちゃんの仲良しは、マルラでした。マルラの棲んでいる樹は、琳子ばあちゃんが一日の殆どをロッキングチェアに座って過ごす窓辺からも見えます。マルラがまだ赤ちゃんの頃、樹の巣穴から時々顔をぴよこぴよこと覗かせているのを、偶然発見しました。それ以来、琳子ばあちゃんは弱った脚で一生懸命に樹の下まで歩いて行き、杖で身体を支えながらマルラに声を掛けるのが日課になりました。

「こんにちは。マルラ」

琳子ばあちゃんの声にすっかり慣れたのか、マルラは巣穴から小さな顔を覗かせ、そのまん丸な黒いビー玉のような瞳で琳子ばあちゃんを見下ろします。その愛らしい仕草と瞳に心を奪われた琳子ばあちゃんは、小さくなった自分の目を細めながら、ずっとこのまま見ていたい気持ちになりました。

ある日、夜も更けて静かな森のそばの家は一段と静まり返り、暖炉の火がパチパチと鳴っている音だけが妙に大きく響いていました。いつになく眠れないままに窓辺のロッキングチェアに腰掛けていた琳子ばあちゃんは、真っ暗になった夜のせいで、ガラス窓が鏡のように自分の姿を映し出しているのを見て、ふと溜息をつきました。

「はあ。私も随分と老け込んでしまったものだわ……」

暖炉の火が一瞬、カッと大きな炎を上げ、琳子ばあちゃんの影が木の壁に大きく映りました。丁度その時です。窓辺でドサッと何かが落ちて来た音がしました。心臓が止まりそうになるくらいビックリした琳子ばあちゃんは胸を押さえ、音がした辺りの窓の外をジッと目を凝らして見つめました。すると窓にへばりつくように止まっているモモンガらしき形が見えました。

「あ、マルラだわ……」

なんとそれは、すっかり成長したマルラの姿でした。琳子婆ちゃんは直ぐに、マルラが自分に会いに来てくれたのだ、と思いました。そう思った途端、今し方自分の老いた姿にションボリとなっていた気持ちも忘れ、いつもはゆっくりとしか動けない身体を、嘘のように軽くロッキンググチェアから起こすと、窓を開けマルラを部屋に招き入れました。

マルラは琳子ばあちゃんが窓を開けるや否や、モモンガの特徴である胴体の脇や尾の付け根にある飛膜をおもいきり広げると、自慢げに飛んで見せました。天井にはむき出しになった大きな木の梁があり、マルラにとっては格好の止まり木です。

「嗚呼、マルラ…… 立派になったこと。もうすっかり上手に飛べるのね」

琳子ばあちゃんはマルラの成長を心から喜び、目に薄っすらと涙を浮かべました。その後、マルラは何度か琳子ばあちゃんに自分の飛ぶ姿を見せると、あのまん丸な黒いビー玉のような愛らしい瞳で、一度だけ琳子ばあちゃんを振り返ると、再び窓から森へと帰って行きました。

「マルラ…… 会いに来てくれてありがとう」

闇に紛れて見えなくなったマルラに向かい、琳子ばあちゃんは胸の前で両手を合わせると、小さな声でお礼を言いました。

マルラが去ったその夜、琳子ばあちゃんはベッドに入ると、マルラが止まっていた天井の梁をしばらく見つめていました。マルラが飛んでいた姿を思い出していたのでしょうか。何とも言えない幸せな気持ちを感じながら、うつらうつらして来た琳子ばあちゃんがそっと目を閉じると、そのまま夢の中へ深く深く入り込んで行きました。きっと夢の中に存在すると言われていた<魂の森>でゆっくりと休んでいることなのでしょう。

そして翌朝、琳子ばあちゃんがベッドの上で目覚めることはありませんでした。 了